

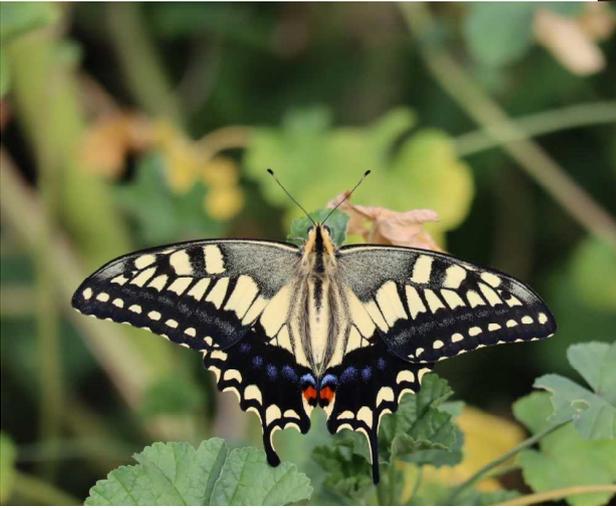
江北の四季

令和2年
9月5日
第23号



キアゲハ(左右とも)

羽の付け根が、アゲハは縞模様、キアゲハは黒っぽい塗りつぶし。



○第四十二候、処暑、末候、禾乃登(こくものすなわちみのる)。「禾(のぎ)」は稲などの穀物ですね。

穀物が実る秋となりました。青々としていた水田は黄金色に染まり、あちこちで稲刈りが始まりました。水田が減ったと言っても、やはり「豊葦原の瑞穂の国(とよあしはらのみずほのくに)」ですね。

豊かな葦原のようにみずみずしく稲穂が実る国。

『古事記』『日本書紀』

身近なところの自然は減り、秋の風情は感じられなくなってきましたが、稲穂の先が重くなって垂れ、黄金色に色づき始めると秋だなと思います。穀物と言えば今日では米や麦ですが、古代では粟だったようです。パンやご飯が普通に食べられる今日に感謝です。なお、粟花と呼ばれる花がありますが、これは粟の花ではなく、女郎花(おみなえし)の別名です。また、大阪名物の粟おこしも江戸時代以降はお米を使っているそうです。

「実るほど頭(こうべ)を垂れる稲穂かな」。実が熟していない稲はピンとたち、中身が熟した稲ほど実の重みで頭が下がる様子から、知識や徳を積んだ人ほど謙虚な人間になることを例えたことわざです。昔の人は

身近な植物から上手に人の道を教えてくれますね。



ツマゲロヒヨウモンか？
ランデブーですね。
夏も終わりのような。



赤とんぼが飛び回るようになりました。日没後、やっと止まったところをパチリ。





ヤブガラシ(藪枯らし)とアシナガバチ

藪を覆って枯らすほど旺盛に生育します。つる性植物は自身で立つ必要が無いので茎を丈夫にしなくてもよく、その分早く成長して光を独占してしまいます。家屋がこの植物に絡まれると貧相に見えるので、別名ビンボウカズラ(貧乏葛)。地下茎で増えるので蔓をとってもとつてもすぐ出てきます。ドクダミ、スギナ、ヒルガオ、そしてこのヤブガラシは、ガーデナー見習いの強敵です。根をくまなく取ったつもりでもわずかの取り残しでまた出てきます。やっかいな雑草です。花は意外とかわいらしいですね。蜜が多いらしく様々な昆虫がやってきます。蝶やアリはいいですが、スズメバチやアシナガバチも来ます。この夏は花を採る際にアシナガバチに刺されました。用心、用心。



ムラサキシキブ(紫式部)の実が色づき始めました。

○9月9日は五節句のひとつ「重陽(ちようよう)の節句」です。五節句は中国から伝わってきたのですが、古来中国では、奇数は縁起が良い「陽数」、偶数は縁起の悪い「陰数」と考えられていたようです。一桁の奇数が重なるのは、一月一日、三月三日、五月五日、七月七日、そして九月九日です。一月一日は元旦のため一月七日に移り、七草の節句として七草を食べて無病息災を願います。三月三日は桃の節句、雛人形を飾り女の子の成長を願います。五月五日は菖蒲の節句(端午の節句)、五月人形や鯉のぼ

りを飾り男の子の成長を願います。七月七日は笹の節句(七夕の節句)、短冊に望みを書きその成就を願います。そして九月九日は菊の節句(重陽の節句)、菊の花を飾り健康を願います。九月九日は陽数の最大値である9が重なるので「重陽」と名付けられたのです。本来、五節句は旧暦の日付で祝っていましたが、明治の改暦で新暦に移ってしまいましたので一ヶ月前後早くなり、植物の時期がずれてしまいました。今年の新暦でも九月九日が今日(こんにち)の菊の節句です。菊酒を飲んでコロナよ飛んでいけと無病息災を願いたいものです。



蒲(ガマ)。

「蒲」は水辺で、そこに草かんむりですから、水

辺に生える草ですね。フランクフルトのような太い穂の部分は雌花が集まった穂で、その上の細長い棒のようなものは雄花の集まった穂です。花の時期が終わると雄花穂は枯れ落ち、軸だけの状態になります。この状態で花材として花屋さんに来ます。晩秋になると雌花穂(フランクフルトの部分)がはじめて、綿毛がふわふわと飛び散っていきます。この綿毛が種で、放置された田んぼがあるとガマが繁殖することになります。

室町時代以前のカマボコは細い竹に魚のすり身を付けて焼いていたそうです。その焼き色や形が蒲の穂にそっくりで、さらにその蒲の穂が銚(ほこ)に似ていることから、蒲銚(カマボコ)となったそうです。室町時代末頃から蒲銚は板付きになり、以前の蒲銚は今日のちくわ(竹輪)になっています。

蒲焼き(かばやき)も蒲の字が当てられています。鰻(うなぎ)は現在では開いて焼かれますが、昔は筒切りにして棒に刺して焼いていたそうです。それがやっぱり蒲の穂に似ているので蒲焼きとなったそうです。

蒲団(ふとん)にも蒲が使われています。蒲の葉を丸く編(あん)んで座る敷物をつくったから、あるいは蒲の穂綿を綿の代わりに使ったからと言われています。

なお、『古事記』の「因幡(いんぱ)の白兔」の話に蒲が出てきます。サメをだましたために皮を剥がれ

た白兔が、大国主の命(オオクニヌシノミコト)に蒲の穂を敷いて転がるようにいわれて助かったのは、止血の薬効のある蒲の花粉「蒲黄」のお陰だったそうです。

余談ですが、私が子供の頃、まだ外灯が無く夜は暗かったですが、乾いた蒲の穂を宮さんの灯明の菜種油に浸けて火を着け、たいまつ代わりにして遊んでいた上級生がいましたね。

○今日の稽古では井口寒来先生に倣って、私も「ススキのうた」を歌ってみました。

『尾花の詩』の本に揮毫していただきました「遊戯三昧」とはとてもいかず、四苦八苦でしたがススキで秋を愉しむことができました。



立華新風体

ドリチヨスラブラブルビームーン、ノケイトウ(野鶏頭)、ススキ(薄)、ケイトウ(鶏頭)、オミナエシ(女郎花)、シユウカイドウ(秋海棠)。



生花新風体

ススキ、ヨウシユヤマゴボウ(洋種山牛蒡)、バラ(薔薇)。



生花新風体

ガマ(蒲)、タカノハススキ(鷹の羽薄)、オオケタデ(大毛蓼)。



生花新風体

ススキ、コスモス(秋桜)、ユキヤナギ(雪柳)

